



連載コラム 院長室だより 病院長 篠崎英夫

この、広報誌が発行される頃には嬉しい知らせが届いているはずですが。病院の周りの桜が咲き始める頃だと喜びも倍増しますが。それは、病院機能評価で日本医療機能評価機構から認定されることです。

昨年、病院の10周年記念事業として病院機能評価を受けようとして決めてから職員一丸となって頑張ってきた1年間にわたる努力が結実するその日が来るからです。20余りの各種委員会がフル稼働、時には休日返上して頑張る職員の姿に125年以上の歴史を持つ城西医療財団職員としてのプライドを感じました。昨年10月の予備審査、今年1月の本審査を経て先月、中間の審査結果が届きましたが、素晴らしい成績でした。

日本医療機能評価機構はアメリカの医療施設認定合同機構（JCAHO）の日本版として平成7年に発足しました。昭和60年に日本医師会と厚生省が合同で病院機能評価研究会を設置したのが始まりです。昨年2月時点で、日本精神科病院協会会員病院（1209病院）の中で認定を受けているのは87病院に過ぎません。

第三者から精神科病院として、或る基準を満たしているかどうか評価され、認定されたわけですが、評価された基準をよりレベルアップすることが今後の課題です。

受審を機会に、この1年で更に深まった職員間の「心の絆」を強くして長期入院患者の退院促進、新規入院患者の短期入院をめざして互いに努力しましょう。

表紙写真

写真タイトル：「雪解けの黒沢の滝」 撮影者：樋口孝（広報委員長）

撮影者のコメント：病院の横を流れている黒沢川の上流にあります。冬は全面氷結の滝です。

精神科病棟だより

統合失調症の精神症状について

副院長 桑村 智

統合失調症の精神症状にはさまざまな種類があるのですが、精神医学の教科書を読んで言葉として理解できても、具体的な事象として理解することが難しいことが少なくありません。勿論私の理解力に不足があるのは否めませんが、教科書に書いてあることと、患者さんとの生のやり取りの中で出てきた言葉がそのまま一致することはあまりありませんでした。

大学病院の精神科病棟で初めて統合失調症の患者さんを担当した私に、当時の指導医が「何も言わなくていいから、いつも傍に居るように」というアドバイスをくれました。単純な、いや実直な私は言われた通り毎日患者さんのところに行き、ベッドの傍らで暫しの時を過ごしました。たまたま同い年の男性の患者さんだったので、あまり気兼ねはしませんでしたが無口な彼は私の他愛のない質問にごく短い言葉で返事をするのが常でした。十日もすると気まずさはすっかりなくなり、彼の所有していた少年漫画誌をベッドサイドで読む日々になりました。会話も途切れ途切れではありますが漫画の内容を中心に徐々に続くようになり、三週間を過ぎた頃「貴方にいったい何があったの？」という私の質問に「夕焼けの中に地表が吸い込まれていくように感じた、怖かった」と答えてくれました。当時の医局会でこのことを報告すると、教授が「それが世界没落体験だね」と教えてくれました。教科書で見た精神症状と自分の担当している患者さんの訴えとが繋がった瞬間に震えるほど感動したことを今でも鮮明に覚えています。

それ以来、患者さんの何気ない訴えに対して注意を払うようになり、少しずつですが精神症状の捉え方を身に付けました。そうなるとう精神症状というものは言葉の上では幻聴や妄想、滅裂思考などと一言で片付けられてしまうのですが、実際には患者さん一人ひとりがテーマを持っていることに気付かされます。幼い頃に家庭や学校などで経験した辛い思いが重なっていたり、社会に出たときに学生の頃から不安に思っていたことが現実となる恐怖に身をすくませる、はたまた自分には全てを超越する力があると信じ込んで到底無茶な修行をするなど、体験→不安や敵対などの陰性の感情→精神症状の発現→行動化といった一連の流れが存在することが解りました。このことに対して先回りをして予防することは困難でも、患者さんの心の揺れは理解することができます。そして理解した上で初めて寄り添えるのだと考えるようになりました。

このことは治療をする者として気持ちに余裕を生み出し、患者さんに対してゆったりと対応できるようになりました。しかし、この「ゆったり」こそが指導医の言った「何も言わずに傍にいる」の真意だったのではないかと考えるようになり、少々ゾッとしたりもします。

精神科病棟 行事レク 節分と雛祭り

2月上旬に、節分の豆まきをしました。豆は、患者さまと一緒に粘土で作った本物そっくりの豆を使いました。鬼を怖がって、隠れてしまう患者さまもいましたが、季節の行事を楽しまれました。



また、3月上旬には、雛祭りの行事を行いました。今年は、ボランティアの方の二胡の演奏を聴きました。曲に合わせて手拍子をしたり、感動して涙ぐまれる患者さまもいらっしゃいました。おやつは、フルーツたっぷりの手作りフルーツポンチでした。季節を先取りした、春らしいスイーツでした。



介護療養病棟だより

認知症療養病棟の作業療法

作業療法士 大下 岳洋

認知症療養病棟での作業療法とは

脳は、体のどこか一箇所でも動かすと、刺激が入力され活性化されます。そのため、脳全体を活性化するためには体全体を動かすことがとても大切です。また「楽しかった」「役に立って嬉しい」など快感情へ働きかけて記憶の引き出しを活性化することも大切です。病棟での作業療法では、脳の活性化を図るために「体と記憶」この2つへ対する働きかけをしています。

当院での作業療法活動の紹介

当院では、手芸、筋力トレーニング、リラクゼーションマッサージ、生活機能訓練、嚥下訓練など、作業療法士が個別に関わっている活動があります。

どの活動にもいえることですが、プログラムには「幼稚にならない活動」を考えることが大切だと思います。自分の両親や恩人など、尊敬する人に対することと同じなのです。その方にも、子供や後輩がいて、それが自分だったらと置き換えたら自然と敬意を払うことができると思います。一例ですが、レクリエーションでは他者や時間を競い、熱くなって精神的賦活を促せる種目やストレス・衝動を適応的に発散できる種目を織り交ぜています。また手芸では、自分たちが楽しく作ったものが常に身のまわりにあり、それを話題にすることで記憶を引き出す働きかけを行っています。

現在の機能をいかに落とさないといったことも大切ですが、落ちてしまった機能でも環境を整えることや、やり方をちょっと工夫することで同じ結果がだせると思います。

『いま現在のこの瞬間』を生きていることを実感してもらえるように・・・

思い出せなくても思い出そうとする、できなくてもやろうとする、その気持ちに寄り添い、できるところまでは自分の力で、最後のちょっとだけを援助する。そうすれば無理なく手が自然に伸びていることになります。患者さま一人ひとりに合った適切な援助を行うことで本来持っていた能力が引き出されていき、それが生活全般にも同様に広がり、繋がっていくのだと思います。

病棟での風景



『節分』

職員が鬼に扮して登場したときの患者さまの反応は良く、楽しんでいただきました。



『カレンダー作り』

患者さまの協力を得て、毎月大きなカレンダーを制作しています。印象に残り、話題に上りやすいように形を工夫しています。



『介護療養病棟の職員』

まず体の健康を第一に、そしてより良いサービスを提供できるよう、日々邁進中です。

第47回長野県精神科病院協会職員研修会開催

平成25年3月15日（金）安曇野スイス村サンモリッツ中ホールにおいて、第47回長野県精神科病院協会職員研修会が開催されました。本年度の研修会は、当院が当番病院として開催運営を担当いたしました。

研修会は、協会副会長である村井病院理事長の渡辺啓一先生の挨拶、そして当院の篠崎英夫院長の挨拶で始まり、各病院の職員の方による研究発表の後、伊藤先生より特別講演を行っていただきました。

研究発表は、看護師・薬剤師・作業療法士・精神保健福祉士と様々な職種の方より、各病院での取り組みや退院に向けての支援、デイケアでのプログラムの課題や役割等を発表していただきました。当院からは、認知症療養病棟における計画的な集団活動についての発表をいたしました。



渡辺先生による挨拶



伊藤先生による講演

特別講演は、国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所社会精神保健研究部 部長の伊藤弘人先生より『医療計画と精神科医療の将来ビジョン』という演題で、講演を行っていただきました。今後の精神保健医療政策において、うつ病（自殺対策）、認知症施策推進5か年計画における早期発見・鑑別診断、精神科救急医療の大切さ、精神科病院とメンタルクリニックの連携の重要性、精神科医療関係者の連携のあり方について分かりやすく説明していただきました。1時間という短い時間ではありましたが、精神科医療に携わる研修会参加者には身近な話題であり、日々の業務に役立つ内容でした。

本年度の研修会には長野県内各地の精神科を有する会員病院より180名近くの方にご参加いただき、大きな規模の研修会となりました。また14題という多くの演題を提供していただいたことで、大変有意義な研修会となりました。最後になりますが、ご協力いただいたみなさまに感謝するとともに、今後も、このような研修会が継続して開催されることを願わずにはられません。



研修会質疑応答の風景

病院の理念

慢性期の患者さま一人一人の病状・置かれている状況を個別的に考え人格を尊重し、全職員が職種を超えてチームを組んで一体的に治療目標が達成できるように最良のサービスを提供する。

病院の基本方針

1. 地域への貢献
2. 医療安全・サービスの質の向上
3. 職場の環境づくり
4. 地域連携
5. 経営の健全化

患者さまの権利

患者さまは、人間として尊重され差別されることなく、公平で良質な医療を受ける権利があります。そのため私達は治療を始める際には、診療についての情報をご本人に説明しご理解いただいた上で患者さまのプライバシーを守り、意思を尊重し継続性のある医療を提供します。

〒399-8103

長野県安曇野市三郷小倉6086-2

TEL 0263-76-5500(代) FAX 0263-76-5501

社会医療法人 城西医療財団

ミサトピア小倉病院

精神科療養病棟150床・老人性認知症疾患療養病棟50床

編集後記

今年は、例年以上の大雪で、嫌になるほど雪かきをした気がします。それでも季節は流れ、病院の敷地内にある桜の木もつぼみが膨らんできて、春がもう直ぐという感じがします。年度内の発行を目指して、何とか間に合わせられたのは、広報委員全員の努力に尽きます。より良い広報誌を目指して、来年度も広報委員一丸となって努力していきます。

広報委員長 樋口 孝